

< 光の中を歩こう >

ヨハネ 12:27-36

イスラエルの王として迎えられ、その歓迎を受けたイエス。

この後、イエスが語られるのは「ご自分の死について」

いよいよ十字架にかかっていくこの時を

「栄光を受ける時がきました。」と言われる。

ご自分の輝かしい、誇らしく喜ばしい時と言われる。



しかし…

「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください。』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。父よ、御名の栄光を現わしてください。」 (ヨハネ 12:27-28)

十字架を栄光の時と言いながらも、十字架の苦しみを避けたいと願う。しかし自分は、このためにこそ今ここに生きているという葛藤の中で、父なる神の栄光が現わされることを願う。父の喜びと御子イエスの喜びは一つだから。父の栄光と御子イエスの栄光は一つだから。父に十字架への道を歩めるよう助けを求めるイエス様の苦悶の祈りに父は答える。

「わたしはすでに栄光を現わした。わたしは再び栄光を現わそう。」 (ヨハネ 12:28)

それは、「わが子イエスよ。あなたを通してわたしの栄光を現わしたし、目前に迫る十字架を通してわたしの栄光を現わす。」という、十字架への励ましのことば。そして、それを聞く群衆にイエスこそ神に遣わされた者、このイエスを通して神の救いの栄光が現わされるということを証しされた。

父と子から外へと向かう愛

父なる神と御子イエスの間には、深い愛と信頼がありながら、その愛は両者の間で完結しないで、外へと向かって行く。この世界とすべての人の救いのための痛みへと向かって行く。

* 賛美「愛の絆」

十字架の栄光を確信されるイエスのことば

「今、この世に対するさばきが行なわれ、今、この世を支配する者が追い出されます。
わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」（ヨハネ 12:32-33）

主イエスを信じ、主イエスとともに光の中を歩く者は幸い

「自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」
（ヨハネ 12:26）

光とは、イエス・キリストのこと。

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、
いのちの光を持ちます。」（ヨハネ 8:12）

19 世紀ロシアの文豪トルストイの著作「光のあるうちに光の中を歩め」

主人公ユリウスの目にイエスは光とは見えなかったが、彼が留まり続けた富や地位、世間的に立派な生活の中に光はなく、どう生きたらいいか分からない暗闇を手探りで歩くような人生だった。しかし、晩年にキリストという光を信じて、この方とともに生きる＝この光の中を生きるようになってからは、外へ向かって行く愛に生きる者となり、彼は、喜びと満足の中に 20 年の余生を生きて、イエスとともに死の向こうへと生きた。

主イエスの光の中を、主イエスと同じ心になって、他者の必要に答え、
また、この被造世界に向かって愛と責任を持って関わっていくことができますように。

この世界を愛して仕えながら、ともにいてくださる主を信じ、
日々新しく主のいのちを生きる喜びをともに知っていきたいと願います。